

平成 23 年度第 8 回

県政知事懇談

湯崎英彦の宝さがし —未来チャレンジ・トーク

と き 平成 24 年 3 月 24 日 (土)

ところ 広島県福山庁舎第 1 庁舎 4 階 141 会議室

広 島 県

目 次 頁

開 会	1
知事挨拶	1
事例発表者紹介	2
ビジョン発表	2
事例発表	8
意見交換	22
挑戦発表	27
閉 会	34

開 会

(司会 (八幡))

大変長らくお待たせをいたしました。ただいまから「湯崎英彦の宝さがしー未来チャレンジ・トーク」を開催いたします。

私は、広島県広報課の八幡と申します。

本日は、チャレンジに向けて、元気の出る楽しい会にしたいと思います。会場の皆さん、どうぞよろしく願いたします。

知事挨拶

(司 会)

それでははじめに、湯崎英彦広島県知事をご挨拶を申し上げます。

(知事 (湯崎))

皆様、こんにちは。本日は、お忙しい中、土曜日でお休みの方も多いと思いますが、こうやってたくさんお集まりいただきましてありがとうございます。

今日は、ここに書いてありますように「湯崎英彦の宝さがしー未来チャレンジ・トーク」というものを100分間にわたって進めさせていただきます。

昨年度、既に今からいうと2年ぐらい前になるわけですがけれども、就任して1年目ということで、市町各地を回らせていただいて、この前身であります「湯崎英彦の宝さがし」をやらせていただきました。そのときに「ひろしま未来チャレンジビジョン」という、広島県の10年後を見据えた総合計画をつくっていたところであったのですが、それができたことから、今年度につきましては、その「未来チャレンジビジョン」をご説明させていただきながら、また各地での住民の皆様の様々な取組や挑戦を発表していただくという会としてこれを進めさせていただいております。

今日は福山市と府中市、そして神石高原町、この三つの市町で、それぞれ挑戦をされていらっしゃる8人の皆様に、事例発表あるいは私の挑戦という発表をしていただくことになっております。実は、この福山市、府中市、神石高原町地域が今年度最後の会になっていまして、県内を8つの地域に分けて進めてきたのですがけれども、今日が8回目ということで、私も今年度を締めくくる会としてとても楽しみにしているところでございます。

これまでの会でも皆さんに本当に素晴らしい発表をしていただいています、プレッシャーをかけるわけではないですがけれども、皆さん、お聞きになられて、とても元気が出

てよかったと言っていたいております。ちょっと長くなると思うのですが、最後までおつき合いいただければと思います。

また、終わりには質疑応答、意見交換の時間も用意しておりますので、それも含めて、是非最後までおつき合いいただければと思います。どうぞよろしく願いいたします。

(司 会)

湯崎知事、ありがとうございました。壇上のほうのお席へお願いいたします。

事例発表者紹介

(司 会)

それでは、本日の事例発表の皆様をご紹介いたします。発表者の皆様は壇上にお上がりください。それではご紹介いたします。

福山市で、毎年5月に開催する「福山ばら祭」などを通じて、福山市内の賑わいづくりと観光振興など豊かな地域づくりに取り組んでおられる福山祭委員会副会長の石井稔さんです。

続いて、府中市で、電気自動車などのレースの開催を通じて地域の活性化と次世代の若者へ技術の習得と実践の場を提供することによる人づくりに取り組んでおられる府中EVレース実行委員会委員長の熊谷光浩さんです。

神石高原町に福山市から家族でIターン定住され、仙養ヶ原ふれあいの里でドッグカフェを経営されるとともに、地元の食材を使った特産品開発と販路拡大など新たな経済成長に取り組んでおられるKOKOカンパニー代表の池口直也さんです。

どうもありがとうございました。事例発表者の皆様はお席にお戻りください。後ほど事例発表をよろしく願いいたします。

ビジョン発表

(司 会)

それでは、湯崎英彦広島県知事が「ひろしま未来チャレンジビジョン」についての発表を行います。湯崎知事、どうぞよろしく願いいたします。

(知 事)

それでは、よろしく願いいたします。座ってご説明をさせていただきたいと思っております。

先ほどちょっと申し上げました「ひろしま未来チャレンジビジョン」ですけれども、10年後の広島県の姿はこんなふうになりたいというのを昨年度とりまとめております。従来であれば計画という名で、まさに総合計画という名前を付けていましたが、それをビジョンと名付けて、違った雰囲気、違った位置付けにしています。

というのは、10年後の計画といっても、なかなかぴったりと10年後はこんなになりますというのは分からないですね。ですけれども、こんな絵姿になりたいというところは描けるので、そういう形でみんながそれを見て進めるものにしてということでビジョンとさせていただきます。

基本理念は、『広島に生まれ、育ち、住み、働いて良かった』と心から思える広島県の実現」と位置付けさせていただいております。これは一見すると当たり前のことを言っているとお感じになられるのではないかと思います。ですけれども、実はこの後にも出てくるのですけれども、この「生まれ、育ち、住み、働いて良かった」と本当に皆さんに心から思っただけだと、これは随分と違う世界、違う社会になるのではないかと思います。というのも、人口の問題というのは我々行政として非常に重要な課題だと認識しています。今、広島県の人口というのは、平成22年で284万人おります。実はピークが平成10年でした。平成10年は288万6,000人、約290万人いたわけですから。それが今は284万人ということで、12年の間に4万人ぐらい減ったという形です。ところが、これから25年後、平成47年をご覧くださいますと、数字が小さいので後ろの方は見えにくいと思いますが、予想では239万人になるということです。つまり、ピークから約50万人人口が減る見込みになっています。50万人というのは、どれぐらいの大きさでしょうか。まさに福山市ですね。まるで福山市がまるごと広島県からなくなりますというぐらいのインパクトがある。それぐらいの大きな人口減少というのがこれから二十数年の間に起きてしまうということです。これまで日本はこんな経験をしたことがありません。日本が経験したことがないどころか、世界でもこんな人口減少を経験したところはありません。例えば戦争など特殊なことは除いて、普通に発展している社会において、こんなことは経験したことがないというのが実態ではないかと思います。

人口の話をしていただきますと、特にこの人口の動きというのは、普通、少子化ということと一緒に語られますけれども、つまり、自然に人口が減っていくということです。それだけではなくて、社会減というのもあります。社会減というのは、広島県外から広島県内に引っ越してこられる方、広島県から広島県外に引っ越しされる方、これの差し引きがプラスだったら社会増になりますし、マイナスだったら社会減ということになるわけです。広島県というのは、ここしばらくずっと社会減が全体として続いています。これ自体も、日本全国一般的な傾向です。東京と愛知県とか、一部のところだけは増えているわけですけれども、ただ、その中身が問題で、若いときに、つまり18歳とか20歳とか、大学に行ったり、あるいは最初の就職をするときに外に出る。だけれども、30歳ぐらいになる

とまた戻ってくる。つまり、社会減がいったん起きるけれども、社会増がもう少し年齢が高くなると起きるとというのが広島県の姿でしたが、今は一貫してすべての年代で社会減になる。つまり、はっきりいうと、広島県から人が離れていっているという状況です。

これが、冒頭申し上げた「生まれ、育ち、住み、働いて良かった」と思っていただけだとしたら、こんな社会減は起きないだろうということです。そういう意味では、ここ何十年も続いている社会減に歯止めがかかるような、皆さんに本当にいいと思っただけのような広島県にしていくということで、そういう意味ではこれは非常に大きな目標ではないかと思っています。

今、人口の問題を申し上げましたけれども、もう一つ起きている大きな変化がグローバル化ということです。グローバル化というのも、何となく昔から聞いていると思うのです。日本の歴史というのは、そもそもほとんどグローバル化の歴史であるといつて差し支えないと思います。そもそも日本に最初に住んでいたのは縄文人です。縄文人の次に弥生人というのが来たのですけれども、弥生人というのは中国から来たわけですから、稲作を日本にもたらしたのですけれども、これも既に当時のグローバル化みたいなものです。それから、明治維新のときに開国をしました。これもグローバル化です。それから一貫して世界の国々とうとうつき合うかというのを日本はやってきて、戦後は日本がどんどん世界に出て行って、世界の果てまで行ってトランジスタラジオを売っていました。そういうことを進めてきたのです。そういう意味では、日本が積極的に進めてきたグローバル化ですが、最近起きているのは、ここにありますように、アジアの国であるとか、新興国と言われる国が急速に力を付けて発展をしてきています。これまでは日本が出て行っていたのですけれども、これからは、日本が好むと好まざるとにかかわらず、こういった国々が日本にやってくる。あるいは、日本が従来商売をしているヨーロッパであるとかアメリカの国で、日本と完全な競争相手になるということです。

皆さん、ご存じのとおり、今、世界でもっとも携帯電話をつくっている会社の一つはどこか。サムスンという、これは韓国の会社です。最近まで日本人の感覚からいうと、韓国の携帯電話はあまり格好よくないと思っていたかもしれませんが、今、ヨーロッパに行くと、ソニーの携帯電話よりサムスンの携帯電話のほうが格好いいと言って子どもたちが買って行く。そういうふうになってきているわけでありまして。

そういうふうに、我々が好むと好まざるとにかかわらず、世界と競争しなければならなくなっていますし、また、日本にいても、世界からやってくる時代になってきています。こういったことにどう対応していくかということがこれから非常に重要になっていく。そういう意味では、人口減少にしても、今、迎えているグローバル化にしても、これまで日本が経験したことがない新しい時代の転換点に立っていると言えらると思います。これまでどおりのことをやっていたのでは、これは実は立ち行かないのではないかと考えているわけですね。

明治維新のときに何をやったか。江戸時代の仕組みを全部変えました。そもそも士農工商という身分があったのが、全部本当にそれをなくしました。藩があったのが都道府県になって、藩というのは自分でお金を刷るという半分独立国みたいなことで、究極の地域分権なのですけれども、それを完全な中央集権にしました。それぐらいの思い切ったことを当時はやったのですが、それは単に欧米とつき合うというだけのことです。それだけのことで、それぐらいの変化を起こさなければ立ち行かなかったのですけれども、今、それと同じようなグローバル化というのが実は進行しているし、我々は人口減少という、その当時は直面していない課題に直面してしまっているわけです。そのための変化というのは、普通のことをそのまま延長線でやっていたのでは乗り越えることができないのではないかと。挑戦をしていかなければいけない。挑戦をするということはどういうことか。挑戦というのは、簡単なことに取り組むことは挑戦とは言わないですね。挑戦というのは、難しいことに取り組むときに挑戦といいます。難しいことに取り組むわけですから、必ず成功するかどうか分からないし、失敗するかもしれないということです。でも、その難しいことに取り組まなければものごとが変わらない。新しいものを生むことができない。あるいは、そういう難しいことに取り組んで得られるような中身を私たちは今つくっていかなければ、その新しい時代に対応できないのではないかと考えているわけです。

そのために、実は広島県としては四つの分野に分けてこの挑戦を行おうと進めています。一つは「新たな経済成長」、一つは「豊かな地域づくり」、一つは「人づくり」、そして、「安心な暮らしづくり」という四つです。それぞれ四つの分野は独立しているわけではなくて、関連しています。この四つの分野を関連させながら進めていこうと、今、取り組んでおります。

具体的にそれぞれどんなことをやるのかということですが、例えば「人づくり」の挑戦では、人づくりの分野での将来像として、これからの広島県を内外から支える人材の育成、また、人をひきつける就業機会の創出など全ての県民が輝く環境の整備により、人が集まり、育ち、生き生きと活躍しています。そういった将来像を描いています。

当面、具体的に何をやっているのか。ここにありますように、女性の社会参画の促進、グローバル人材の育成・確保、人口の社会減に歯止めをかける対策、また、将来の広島県を支える人材の育成、これは子どもたちの教育ということでもありますけれども、こういったことを進めようとしています。

なぜかという、要は、先ほど人口減少というお話をしました。これが大きな課題になるのは、働き手が減ることです。働き手が減るということは、つまり、お財布の数が減ることです。お財布の数が減ると何が起きるか。例えば、今日、神石高原の皆さんもいらっしゃっていると思いますけれども、神石高原町のような人口が減っている地域で病院を維持するのは非常に大変になっています。あるいは、学校を維持することが大変になっています。もっと言うと水道を維持するとか、あるいは道路を維持するとか、そ

うということも大変になってくるわけです。ここをどういうふうに維持するか。かたや財布の中身はどんどん減っていく、小さくなっていきます。そうすると、これを維持するお金もなくなってくるわけです。人口が3割減ったから水道は3分の1でいいとか、3割減らしていいとか、そういうわけにはいかないわけですから、これを支えることをやらなければいけない。そのためには財布の中身の減少を少しでも抑えなければいけない。そのためには、実は女性が、今、半分ぐらいの方しか働いていないというのが現状としてあるわけです。人口は減るけれども、今、社会で働いていらっしやらない女性、実際には、いったん働くけれども辞められることが多いわけです。それを継続できるようにすることによって、働き手の減少の緩和ができるわけです。そういう意味で、女性の社会参画というのが、男女平等という観点以外からも、社会を支える仕組みとして非常に重要です。そのために、この女性の社会参画の促進ということに力を入れて進めようとしています。

また、グローバル人材というのは、先ほど申し上げたようなグローバルな社会へ対応できる人材を確保しようということなのですけれども、そのために、例えば県立のすべての高校で海外の学校と姉妹提携を結んで交流しましょう。そこで留学生も出しましょう。実際に1年なり海外で暮らした経験を持つ人をつくっていきましょう。県立高等学校はすべてで実施すれば毎年八十数名の留学経験者が出てくる。実は、今、県内で高校で留学するのは、私もそういう経験があるのですけれども、年間16人ぐらいなのです。これを6倍、7倍にしていこう。もっと時間がたつと、毎年2人だそう、3人だそうと拡大できるのではないかと思いますけれども、そういう形で少しずつ経験した人を増やしていく。こんなことを進めています。

また、「新しい経済成長」ということで、雇用を確保していくということです。雇用を確保していくことが社会の仕組みを支える原動力になっていきます。そのために新しい成長産業の育成であるとか、あるいはこれからまだまだ伸びていくアジアの市場の獲得をしようとか、そういったことを進めようとしています。

これも、こういった産業にどれだけ県なり公がかかわるのかという問題があります。中には、そういったことは民間に任せておいて、かかわらないほうがいいという考え方もございます。でも、先ほど申し上げたようなこれからの人口減少という時代を考えると、あるいはこれまでライバルでなかったアジアの国々の企業がどんどん我々のライバルになっていくということを考えると、今、行政も、それから民間も一丸となって新しい産業づくりということに取り組んでいかなければいけないだろうということで、これも先ほどの難しいことの挑戦の一つでありますけれども、進めようとしています。具体的には、医療産業、広島県内には医療産業はほとんどありません。ほとんどありませんが、実は医療産業に応用できる技術というのは県内にたくさんあります。自動車であるとか、あるいは電子機器、こういった技術を持っている企業はたくさんあります。それが医療機器にも応用されるので、そういった技術を応用して新しい分野に展開していこう。その集積をつくって

いこうといったようなことをやっています。

それから、「安心な暮らしづくり」。本来、行政というのは、こういった安心な暮らしをしっかりとつくっていくというのが本務であると思っています。ただ、今申し上げたように、将来の人口減少、それから経済力の低下が大きく懸念される場所なので、当面は経済と人づくりに力を入れて進めようとしています。でも、暮らしづくり、ここもしっかりと取り組んでいく。今、特に進めていますのが、地域医療体制の確保ということで、先ほどこちょっと神石高原町の例を出させていただきましたけれども、過疎地域であるとか、あるいは中山間地域と言われる地域で、お医者さんがしっかりと確保できるような、そういった対策を進めています。

また、がん対策日本一も進めようとしています。この一環として、実は今、広島市に高精度放射線治療センター（仮称）というものをつくろうとしています。広島大学の医学部と県立広島病院、それから広島市民病院、そして広島赤十字・原爆病院という広島市内の四つの病院が合同でお医者さんを出してこの治療センターをつくる。運営は県医師会が行うことにしているのですけれども、こういった4病院はある意味ではお互いライバルなのですけれども、こういった取組を協力してやってもらう。最初はそんなことはうまくいかないのではないかというお話があったわけですが、今の時代、そういう難しい困難を乗り越えて協力してやらないと広島県の医療レベルは上がらないということで、今、皆さん納得していただいています。そういった難しいことにあえて取り組んでいくことが、こういった面でも必要になっています。

また、再生可能エネルギーという面でも、先日中国新聞の1面に出ていましたけれども、今度電気の買取制が始まります。そこに向けて、実は県民の皆さんがお金を出し合って家屋の屋根にソーラー発電をつける。そんな仕組みを今、考えています。これなども日本でそんなことをやろうとしているところはほかにないのですけれども、それぐらいやって普及を進めることが必要ではないかということと、皆さんが拠出した基金に利子のようなものがついてくることによって買取制度の課題になっている電気代が上がる部分をカバーしようという考えでやっています。こういったことも非常に難しいことですが、思い切った、これまでにないとか、ほかがないからやらないということではなくて、やるべきことを取り組んでいこうとしています。

それから、「豊かな地域づくり」。これも皆さんが誇りを持てる地域を目指していこうというのが将来の大きな姿になっているわけですが、それに取り組んでいます。特に国際平和拠点の構築ということで、平和行政にも県が積極的に取り組んでいます。これも広島市がやればいいじゃないとか、いろいろなご意見があるわけですが、ただ広島に来る外国人観光客は、日本全体では、中国とか台湾とかアジアの方々が多いですけれども、広島県は特別で欧米の方が多いです。なぜかという、この平和の問題に関心があって広島を訪れる。原爆ドームを訪れる方が多い。併せてしまなみであるとか、ほかの地域

も訪れるわけです。ということは、この平和の問題をしっかりと世界にアピールすることが実は地域の活力を生むもとにもなっているということで、これもしっかりと取り組もうとしています。

最後に一つだけ申し上げたいのは、行政がいろいろなことをやっていますけれども、行政ができることは限られています。広島県が本当に変わろうと思ったら、これは県民の皆さん、個々人もありますけれども、県の中にある企業であるとか、あるいは団体であるとか、そういったすべての県内の活動をされている主体が変わらなければどこにもいかないと考えています。というのは、例えば医療でもそうですけれども、どんなに素晴らしい医療政策を立てても、実際に医療をされるのはお医者様だったり、看護師の方だったりするわけです。どんなに素晴らしい教育方針を立てたとしても、それを実際に実行するのは先生であったり、あるいは親であったりするわけです。経済もそうです。どんなに素晴らしい経済政策を思いついても、実際に活動している企業が新しいことに取り組んだり、困難な課題に取り組んだりしなければ、何も変わらないわけです。つまり、すべて現場がすべての変化を生んでいくわけですので、まさに広島県を変えていく原動力は県民の皆さん一人ひとりであるということで、是非新しいこと、新しい挑戦に県民の皆さんに取り組んでいただきたいと思っています。

今日、事例発表の皆さん、あるいは私の挑戦を発表していただく皆さんは、まさにその一人ひとりの力として挑戦をしていらっしゃる。その積み重ねが広島県を変える。これは、お話を聞いていただくと、皆さん、本当に実感できると思いますので、私の話はこれくらいにして、皆さんのお話をお伺いしたいと思います。どうもご清聴ありがとうございました。

(司 会)

湯崎知事、ありがとうございました。皆様とともに、広島に生まれ、育ち、住み、働いて良かったと心から思える広島県の実現に向けて、地域の強みを生かして挑戦を続けていきたいと思えます。

さて、湯崎知事への質問など意見交換は、次の事例発表が終了した後に併せて行いたいと思えます。どうかよろしく願いいたします。

事例発表

(司 会)

それでは、これから事例発表に移りたいと思えます。湯崎知事にはこの事例発表のコーディネーターを務めていただきます。湯崎知事、どうぞよろしく願いいたします。

(知 事)

それでは、早速事例発表に移らせていただきます。今日は3名の方に来ていただいております。それぞれの地域において積極的に活動していただいて、挑戦を続けていらっしゃる方々です。

はじめは、福山市の石井稔さんです。石井さんは、福山ばら祭や福山夏祭りなど、福山市の中心部で開催する大型イベントの実行委員会である福山祭委員会の副会長として、また、バラによる美しいまちづくりを進める福山ばら会の会長として、様々なイベントの開催による賑わいづくりなど、「豊かな地域づくり」に挑戦をされていらっしゃいます。

今日の発表のテーマは『『ばら』によるローズマインド溢れる協働のまちづくり』です。それでは、石井さん、よろしくお願いいたします。

(事例発表者 (石井))

ただいまご紹介いただきました石井でございます。それでは10分という時間でございませので、進めさせていただきたいと思っております。

まず、バラのまち福山ということですがけれども、福山をお話しするときに、尾道と倉敷に挟まれた福山という紹介の仕方を大体させていただきます。何で福山は比較をしていかなないといけないのか。福山にもいいところはいっぱいあるじゃないか。お城があったり、鞆があったり、そして、バラのまち。このバラのまちということをちょっと皆様にご紹介をしながら、知事にもバラのまちをご理解いただきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

広島も原爆で被害に遭っていますけれども、福山というところは、8月8日の空襲で市の8割方が焼土化いたしました。これが焼けた状況です。

昭和32年ですがけれども、美しいまちをつくるためにということで、映っているのは当時の市長の徳永豊さんです。市長さんと近所の住民の方たちが集まって、バラを植えて美しいまちをつくりましょうということを提案されました。近所の住民も一緒にやろうと、まさに協働のまちづくりのスタートということもあります。現在のばら公園の地に1,000本のバラを植えました。実は当時はバラというのが非常にめずらしいものですから、夜中になるとこのバラを根こそぎ抜いていく人がいたということがあったらしいです。ですから、当時、この近所の方々は寝ずの番をしたというふうな話も伺ったりしております。こういう状態でばら公園に1,000本のバラを植えて、なんとか美しいまちをつくろうということをやりました。

それが講じて「ここに善意の花がひらく」ということで、国のほうから表彰もしていただいたりもしています。

今ではこういうふうには、こちらはバラが5,500本咲いていますけれども、5月から11月まで、ずっとバラが咲いたり、また花が散ったり、また咲いたりということで繰り返す

で咲いております。ばら公園の状況をご覧いただくと、いろいろな楽しみ方を皆さんされていらっしゃると思います。春にばら公園の近所に行きますと、バラの香りがどこからともなく漂い、すてきなばら公園になっております。

これは2006年、この近隣の南小学校の子どもたちが参画してくれましたけれども、世界バラ会議というのが大阪で開かれました。広島宮島に行く途中に福山でランチタイムをとりたいということで、このばら公園でランチを召し上がっていただきました。そのときに小学校の子どもたちがお迎えをいたしまして、ようこそばら公園、慣れない言葉で>Welcome to Fukuyama Rose Garden と一生懸命お迎えをしてくれまして、バラのピンバッジとか、バラの折り紙を皆さんにプレゼントしていただいて、非常に各国の皆さんが楽しんでいただいたばら公園の地でございます。約200人ぐらいの外国の方がお越しいただきまして、子どもたちとも交流をしながら、バラの地、福山を楽しんでいただきました。

これは、食事会の様子です。ガーデンの上に、こういうふうに出させていただきまして、ランチを楽しんでいただきました。

記念植樹も羽田市長さんと一緒にさせていただきました。

現在でもありますけれども、福山ばら公園というのが、日本では今三つなのですけれども、世界バラ会連合というのがありまして、そこから優秀バラ園であるということで賞をいただきまして、この碑がばら公園の地にもございます。

そこに、ばらハウス花園というのがあります。これは、我々福山ばら会のメンバーがボランティアで、このばら公園の中にある昔の休憩所だったのですが、どんどんバラを植えていくのはいいのだけれども、その後で、このバラを育てるためにいろいろと困ったところを聞きに行くところもないということで、我々ばら会で考えまして、こちらを福山市からお借りいたしまして、こちらのほうで毎週日曜日にバラの相談所というのを開設しております。バラの困ったというのが何かあれば、葉っぱの先が縮れて困っているとか、枯れそうで困っているとか、そういうときにこちらのほうにおいでいただいて、ここで、そうなんですかということで、大体帰られるときにはみんなうれしそうに帰っていただいております。そういったことをここで開催しております。

ここに、メンバーの一部がいろいろと楽しんでいます。中でも、講習会をしてみたり、自分たちでもレベルアップを図ろうということで、ばら会のメンバーがいろいろ勉強しながら日々頑張っております。

そういったリーダーがだんだん育っていらっしゃいます福山市でございます。この間もばら大学の終了式がございましたけれども、ばら大学というのが福山にございます。そういった中で育っていった人たちが地域にどんどん出て行っていただきまして、地域でもいろいろな講習会をさせていただいております。

このバラがこうだよ、このあたりがこうなっていますよという話をしながら、バラの説明を現場でしながら、これは私ですけども、月1回、バラの講習会を無料でやっ

す。シーズンごとに、3月は3月、4月は4月、こういうふうなつくり方をしてバラを育てまじょうと、無料の講習会をしています。最初は20人ぐらいたったのですけれども、最近では100人を超えるような状況で、会場がいっぱいになって、2会場に分けないといけないこともしばしばございます。

みんな一生懸命、これはバラの接ぎ木をしている写真です。バラの枝をさしこんで、そこからバラの花が咲く。自分のバラを育てるということをみんなで行っています。

それから、現場に出て行って植え方の指導でありますとか、こちら子どもたちが一緒になって植えて、バラは命があるということで、この枝から出てきて花が咲いたときに、子どもたちは本当にうれしそうな顔をします。自分たちが育てたバラというのを子どもたちは感じてくれていると思います。

福山市の市長さんが新築の家にバラの苗をプレゼントされていらっしやいまして、とにかくバラを増やそう。福山市としては、2016年に市政100周年になりますので、そのときに100万本のバラのまちにしようということで、行政さんも、それから民間も、我々も一緒になって、100万本のバラのまちにしようということで頑張っております。

これは苗を無料配布しています。今年度6,000本、バラの苗を無料で配らせていただきました。

そういったことのおかげで、これは市の関係の春日池公園という公園なのですが、ばら公園が、先ほどの1,000本のバラのばら公園から始まりまして、あちらこちらにバラが増えていきました。これは小学校です。小学校にもこういうバラ園ができ、幼稚園の中にもバラ園があります。とげがあっても、そういうものはちゃんと命の教育で大事に育てることを教わっています。これは大学です。平成大学さん。これは病院です。市民病院さん、山陽病院さん。これは一般のご家庭、こういったところにも、バラが市内のあちらこちらで、これは企業さんです。これはJFEさんです。福山のまちの中、5月になりますと、あちらこちらでこういった状態でバラが咲き乱れています。

これは鞆です。こういう状態で、福山の至るところにバラが咲き乱れる状況です。

これは小学校ですが、今、小学校の子どもたちは1年生に入学しますと、福山市からバラの苗が入学祝いでプレゼントされます。そういうこともありますけれども、子どもたちもバラの育て方を一生懸命こういった状況で熟知して行っております。みんなで一緒に育てていくバラということで、本当に楽しみが増えてきているようです。

これはローズブックです。110カ所、これに掲載しています。ばら会50周年の記念に、ばら公園だけじゃないよ。福山中、至るところにバラがあるよということを表現したくて、こういう本をつくらせていただきました。実際、福山市内ではバラ花壇が300から400あるのではないかと想定されています。

これは福山のバラのローズふくやま、代表たるものです。ビューティーふくやま、プリンセスふくやまと、福山という名前がついたバラがこれだけ数があります。

これは緑町公園にありますローズヒルというばら公園です。これは実はオーナー花壇ということで、1人2,000円出しますとオーナーになれます。こういうふうなバラ花壇に、これは誰のオーナーの花壇ですよということで一つずつ名札がついています。

これは、この間から始まったのですが、バラの基金付きの自動販売機です。この飲料水を買っていただきますと、1本につき3円、バラの苗を購入したりする基金が我々福山ばら会に入ってまいります。そのうちの1円が、実はばら祭、夏祭りということで使っただけのようになっております。協賛金もそういった状態で膨れ上がっていくようになっていきますし、このばら祭、昨年度80万人を超えます人にお越していただきまして、皆さんでバラを楽しんでいただく。バラのコンテストでありますとか、これはミニバラですけれども宮島を表現しています。ちっちゃなミニバラで、こういったことをバラでも楽しむことができます。

ローズパレードです。

バラの結婚式もやっております。ローズウエディングといいます。

商店街に行きますと大道芸、それから、バラの歌の街角コンサート、夜になりますと、これは以前のもので、ライトアップされまして、夜のバラも楽しめます。

それから、今回も一生懸命頑張ったのですが、ローズボランティアということで、バラのボランティアをどんどん、ばら祭自体が市民みんなでやる祭りということで、一人ひとりが力を出し合っている。決して行政がやりましょうということではなくて、市民みんなで作りあげているのがこのローズフェスタ、ばら祭です。

そして、これがバラの折り紙でございます。これはローズフォーピース、折りバラということで、広島市さんにもお持ちして、折りヅルではなくて、折りバラを献納させていただいております。

こういったばら祭、ばら公園、緑町公園、こういったものをアクセスして、隣にありますので、つないで、できますればデッキをつくって行き来ができて、そのふもとにバラの博物館をつくりたいという構想を考えております。バラを愛でいただくのもいいですが、バラのない月でも、なぜバラのまちになっていったのか、そういったことも含めて、福山は何でバラのまちなのか、大人も子どももみんなが理解して、先ほど県知事がおっしゃられた住みよいまち、住みよい福山をつくっていかないといけない。

そういった中に、福山としては、今、出していましたローズマインド、これは実はバラを育てるときに必要な、だんだん身につけてくることですが、バラを育てるときに思いやりとか、優しさとか、助け合い、そういったものを身につけていった福山の人がどんどん増えていく。ローズマインド。こういったまちに福山はなっていきたいということで、挑戦をしたいと思っております。よろしく申し上げます。どうもありがとうございました。

(知 事)

石井さん、どうもありがとうございました。プレゼンテーションは写真が多くて、こんなにきれいになるんだというのが改めて実感できました。おっしゃっていましたが、初めは市長が昭和33年に提唱されたということから始まったと思うのですが、実際にそれを育てていかれたのが市民の皆さんで、石井さんをはじめとする先代、先々代といらっしゃったと思うのですが、そういった方々がみんなを巻き込んでやられていったんですよね。行政だけがこれをやっていたら、決してこんなに広がらなかったと思うのです。ばら祭も市民の皆さんが主体となって展開をされていった。今、講習会をやっても100人を超えるという、すばらしい活動に展開していると思います。

先ほど私が申し上げた住民の皆さんが動いてはじめて変化が起きるんだというのを、まさにその事例としてお示しをしていただいたのではないかと思います。福山で展開されているこのバラのまちづくりがますます活発になって、100万本のバラのまちが実現することを私も祈念しております。もう一度石井さんに大きな拍手をお願いいたします。どうもありがとうございました。

それでは、続きまして、府中市の熊谷光浩さんをお願いしたいと思います。熊谷さんは、府中EVレース実行委員会の委員長として、これまで3回電気自動車などのレースを開催されて地域の活性化に取り組んでおられます。

また、このレースの開催を通じまして技術者を目指す若者、府中市は非常に技術力の高い会社がたくさん集まっているところです。そういった府中市で技術者を目指す若者にもものづくりの機会を提供することによって「人づくり」の挑戦もされているということでもあります。

発表のテーマは「府中EV&ゼロハンレース～モノづくりのまち府中市でモノづくりの醍醐味を次世代の若者に体験してもらいたい～」であります。それでは、熊谷さん、どうぞよろしくをお願いいたします。

（事例発表者（熊谷））

皆さん、こんにちは。ただいまご紹介いただきました府中EV&ゼロハンレース実行委員会の熊谷と申します。これより簡単ではありますが、我々の活動を発表させていただきます。まずはこちらの動画をご覧ください。

【ビデオ上映】

「圧巻でした。」

「ついてなかったですね。」

「いろいろと大変だったね。」

「大変でした。」

「予選では止まっちゃったんですけども、楽しかったです。あと、悔しいで

す。」

「いいですね。この悔しいというのがばねになってね。」

大体こんな感じですが、よく分からないですよ。というわけで、これから詳しくお話しします。

まず、そもそもこの大会の趣旨を説明いたします。我々実行委員会が企画する府中EV&ゼロハンレースは、大会を通じて、ものづくりの実践の機会を広く提供することによって、ものづくりの醍醐味を次世代の若者に体感してもらい、これからの日本の工業技術を背負って立つ人材の育成に一役買うこと。また、理工離れが問題視される今日において、その裾野を広げていくことを目的として立ち上げました。

さらに、学生だけではなく、一般のチームの参加者も募集することによって、年齢や学校の枠を超え、技術交流の場も提供できますし、ゼロハンカーという従来のガソリンエンジン車だけではなくて、100%電気で走るEVカーを製作し、同じレースに参加させることによって、参加者のみならず、見に来ていただく観戦者に対しても、エコカーというものに対する意識の啓蒙につながるものと考えております。

もちろんこの大会を府中市で開催することにより、ものづくりのまち府中市を改めてアピールし、市内企業への就業の促進や観光資源のPRにもつながっていくものと考えております。

こうした趣旨に賛同してくれた市内外の有志メンバーにより実行委員会を結成し、また、当初こうしたレース大会ができないものかのご提案、ご相談いただいた福山大学の工学部機械システム工学科様にご協力いただいて、レース規定の策定や学校間の調整、そして、レース当日の進行など、素人である我々ではできない未知数の分野を担当していただくこととなりました。第1回の開催までは幾度となく集まり、あるいは、夜を徹して準備を進めてまいりました。

しかし、このとき我々実行委員会として、みんなが共有していた思いが二つあります。一つは、とにかく事故なく、無事、安全にレース大会を成功させること。そしてもう一つは、参加してくれた学生たちに一つでも楽しかった思い出を持って帰ってもらいたい。この二点であります。この二つはこれから先も変わることなく、我々の大切な思いとしていきたいと思えます。

先ほどもお話ししましたが、私をはじめ実行委員会のメンバーはこのような車の製作やレースにかかわった経験のある者が全くと言っていいほどおりません。本当に素人で、手作りのレース大会を開催することができるのだろうかと不安を感じながら準備を進めてきました。しかし、主催者側がとにかく楽しんでやってみようやという非常に前向きなスタッフに恵まれたことで、これまでなんとかやってこられたと思えます。

ただ、やってみると、様々な苦勞もありましたし、逆に、やってみて初めて分かったこ

とや、うれしい体験もたくさん得ることができました。これからちょっとそんなお話をさせていただきます。

始める前は猛スピードで疾走する車や白熱するデッドヒート、そして、クラッシュして車が炎上するのではないかと、いろいろ想像しましたが、幸い、今のところ炎上するといったような事故は起きておりません。そうです。このレースは、我々が想像たくましく思うほどに危険ではなく、むしろ意外に安全だったと言えるかもしれません。一周約 300m のコースを速い車で 1 分弱でラップを刻んでいきますので、時速に直してみると、およそ 18 km になります。コースは、会場の関係上、長い直線がとれず、きついカーブが連続するため、この程度の平均速度となっております。しかし、わずかな直線での攻防は逆に見応えのあるものとなっております。ドライバーが気の焦りかコーナーで無理をするあまり、マシンが悲鳴を上げて、ついにはこのようにタイヤがとれてしまう。タイヤが外れて飛んでいくというシーンも何度か目にしました。衝突によるけがや炎上事故については、今後も発生しないとは限りませんが、初心を忘れずに、常に起こり得る最悪の事態を想定して、安全第一での運営をこれからも常に心がけていきます。

次に、そのコースについてですが、府中市の桜が丘多目的グラウンドという、どこにでもありそうな普通の土のグラウンドを使用しています。白線とカラーコーンによりコース取りをして、危険ポイントと思われる箇所には古タイヤを積み重ねたりしています。土であるため、レース前の試走で車が数周するだけでコーナーが掘れてしまい、かなり高低差のある砂場のような状態と化してしまいます。この砂場に足元をとられて立ち往生する車両があるため、ある程度の間隔でコース整備を人海戦術で行いますが、この作業がとてもしんどく、やれども、やれども、すぐにまた砂場になってしまうので、現状頼りになるのはスタッフの根性だけです。また、大会終了後は建設業者さんに重機で整地をしてもらっていますが、そのためのお金が予算を圧迫しているのも事実です。

お金についてお話ししますが、参加者からいただく参加費と、市内の企業からの協賛金で賄っております。協賛金については、最初はどれだけ集められるのか大変不安でしたが、先ほどお話しした趣旨を説明してあがると、どの企業でも快く賛同していただき、応援するから頑張ると温かい励ましの言葉もいただいております。府中市や会社の PR もあると思いますが、ものづくりの将来の担い手を応援したいという親心のような温かい気持ちを感じさせていただいております。スポンサー様への見返りとしましては、表彰式などに使うスポンサーパネルや実行委員会のレース車両へのロゴ入れ、この車もそうです。そういったもので絶大な広告効果が見込めますので、この機会に広島県庁様におかれましても、是非とも前向きにご検討のほう、よろしく願い申し上げます。

大会前日に前夜祭というものも行っております。我々実行委員会とのジェネレーションギャップや、理数系でないメンバーが実行委員会に多いため、参加する学生の気質や本音を知ることが今後の大会の参考にもなるのではないかと考え企画してみました。乾杯はソ

フトドリンク、このような感じで行いますが、今話題のB級グルメである府中焼きの焼きたてを食べ放題とし、我々実行委員会メンバーによる漫才やゲームといったアトラクションなど、精一杯のおもてなしをしてきたつもりです。しかし、翌日に迫るレースの緊張からなのか、それとも、厳しい先生が見ているからなのか、あるいは我々が単にすべっているだけなのか、彼ら学生たちはこちらが思うようにはじけてくれません。これが今時の学生なのか、若者なのかと、半ば沈滞ムードになりつつありましたが、そんな中、先日毎回参加いただく呉市の某高専の先生から、生徒たちも毎年前夜祭を楽しみにしていますよという予想外のお言葉をいただきました。来年こそは何としても彼らから笑いをとってやろうと、我々は密かに、そして勝手に盛り上がっています。

大会を開催して、学校の先生や学生たちと話をして分かったことでもっとも大切なことは、実習で車をつくることはできても、それを実際に走らせてみる機会がなかなかない。まして、その性能をフルに発揮させる場であるレースをする機会がないということでした。言われてみればそのとおりです。運転して故障し、原因を探り、また、それを繰り返す。そして、マシンの持つ性能を限界まで引き出すためにはどうすればいいかを常に考え続けるのは、レースをしていないとできません。我々がその場を少しでも提供でき、たとえ完走できずにリタイアしたとしても、学生が得るものがあつたら、使命を果たせたものと考えております。

最後になりますが、問題点とその改善策、そして、今後の目標をお話いたします。

まず、改善するべき点としては、EVカーの参戦が少なく、そして、EVカーが弱いということです。EVカーの歴史が浅いこともあります。構造がエンジン車に比べてシンプルであることから、いまいち製作におもしろみがないのかもしれませんが。また、自動車系の学校ですと、まだまだエンジンから学ぶことが多く、それが基本になっていることは間違いありません。ちなみに、これがEVカーです。車体は段ボールですけれども、後ろにマフラーとかありませんので、エンジンカーとは大きく違っております。ただ、これについては、時代の後押しにより、これから徐々に増えていくものと考えております。

そして、EVレースという大会名を揺るがす最大の問題、EVカーがレース上、いまだに上位争いに加わってこないという点についてですが、これについても、大会規定を改正していくことで打開は可能と考えておりますので、関係各位のご意見をお聞きしながら今後も見直しを続けていく予定です。

参加台数が増え続けていることもうれしい悩みであります。現状、大会は1日で行いますが、今年の参加台数約40台弱でかつかつといった感じでした。うれしいことに、過去3年、年々参加台数が増えており、1回のレース走行台数を増やすなどして何とか対応してきましたが、もうそろそろ限界です。ちなみに、今、決勝戦は6台混走で走っております。これが限界です。参加者のための駐車場や整備会場にも限りがありますし、先ほどお話ししたコース整備の件もありますので、これ以上台数が増えると、例えばエントリー制限を

設けなければならないといった状況です。大会趣旨としてはあくまでも学生が主役ですので、逆に一般参加が増えた場合の対応にも苦慮します。いずれにしても大変うれしいことではありますが、実行委員会としては真剣に協議すべき問題であります。

実は、そうした課題の背景にはこんなことがあります。ある学校の先生からこのようなことを言われました。この大会を全国大会にしてほしい。名前だけでもいいじゃ。そうしてくれたら参加しやすくなる。お話をよく聞いてみると、単なる府中での大会では、わざわざそこまで行く理由を求められるのですが、全国大会ともなればもっと参加しやすくなるということでした。あと、予算がおりるかどうかということもあるのでしょう。全国大会のニーズがあるということが分かりました。また、ほかにこのようなゼロハンカーの大会はあるようですが、現時点でE V&ゼロハンレースの全国大会というのはまだないようですので、言ってみれば早い者勝ちです。お話ししたように、まだまだ我々にも課題があります。E V&ゼロハンレース全国大会 in 府中という大会を開催するという熱い気持ちを持ち続けて、今後も楽しく頑張って挑戦していきたいと思っております。

最後に、寒い中でもいつも頑張ってくれるすべての実行委員会のメンバーと参加者の皆様、そして、応援してくれる皆様に心から感謝の意を表したいと思えます。本日はこのような発表の場をいただきまして誠にありがとうございました。皆様、ご清聴ありがとうございました。

(知 事)

熊谷さん、ありがとうございます。これも実行委員会方式で、市民の皆さんがつくっていらっしゃるということだと思えるのですけれども、本当にいろいろな苦勞をしながら、ただ、営業はお上手なので、企業のスポンサーの営業もやっていたらっしゃる。だからこそ応援団が増えていくのだと思うのです。例えば行政に補助金をくださいと行って行政の補助金でやってしまうと、営業はしないですね。営業しないと、地域の応援団が増えていかないと思うのです。まさに、皆さんが手作りやって、困っているから皆さん助けてくださいということによって、逆に輪が広がっていくということを実証されているのではないかと思います。また、いろいろな難しい困難もまだまだおありだということですが、それもみんなが一緒に乗り越えていくことによって、また結束が強くなって、熊谷さんも、実行委員会の皆さんも、終わった後の達成感も高いのではないかと拝見して感じました。これが本当に全国大会、早い者勝ちだから早速つくられて、本当に全国からいろいろな方が来られる。そうすると、またいっぱい課題が出てくると思うのですけれども、課題を先に考えるより、やってしまったほうが勝ちだと思いますので、是非是非実現するように、広島県も心から応援を、金は出しません、口は出して応援はするというのでやらせていただきたいと思えます。もう一度熊谷さんに大きな拍手をお願いいたします。ありがとうございました。

(知 事)

それでは、最後の事例発表になります。神石高原町の池口直也さんです。池口さんは、子どもと伸び伸び暮らせるようにと、最初のご紹介にもありましたけれども、福山市内から神石高原町にIターンをされて定住されていらっしゃいます。

そして、仙養ヶ原ふれあいの里で、自然に囲まれて、愛犬と飲食を楽しめるドッグカフェを経営されるとともに、神石高原メンチカツなど、地元の食材を使った特産品を開発されて販売されるなど「新たな経済成長」に挑戦をされていらっしゃいます。

発表のテーマは「子育て定住の見本になる！～神石高原町へIターン」です。それでは、池口さん、よろしくお願いいたします。

(事例発表者 (池口))

皆様、こんにちは。神石高原町から来ましたKOKOカンパニーの池口といます。どうぞよろしくお願いいたします。

私は昨年3月まで福山で親の家業を手伝いながら、嫁と子どもと3人で暮らしておりました。5年前になりますけれども、NGOをされている大西健丞さんと愛犬を通じて知り合いになり、それから食事に行ったり、旅行に行ったり、犬と一緒に遊びに行ったりする仲になりまして、そんなときに、大西さんが家に帰ってきたときにはのんびりと暮らしたいと、神石高原町に新居を立てられてお引っ越しされたのです。それで、ちょくちょく私も神石高原町に足を運ぶようになり、神石高原町のすばらしいところをいろいろ見ることになり、興味を持ち始めました。

ちょうどそのころ息子が小学校1年生で、新涯小学校という当時全校生徒が800名という福山のマンモス校で、そこでいろいろな問題がありました。教育の問題、近所の親の問題、環境の問題。そんな中、嫁と常々話をしてきたのが、ここで子育てをしても大丈夫なものかどうか、ずっとそれを懸念していました。ちょうどそのころ、のんびり暮らしたいと大西さんが神石高原町に移住をされ、まちづくり推進委員会という委員会の座長になられ、そこで神石高原町のこれからの展望とかいろいろ、そういうことをお聞きする機会が増えまして、これから神石町はこういうふうになっていく、こういうことがしたいということを聞かせていただき、だんだん僕も興味を持ちだしまして、神石高原町に、子育てをするんだったらこんなところがいいのではないかと、学校とかいろいろ調べさせていただきました。まず調べたのが小学校です。神石高原町の入口あたりにある来見小学校という小学校があるのですけれども、全校生徒が50人。びっくりしました。800人からいきなり50人です。大丈夫なのかと、校長先生ともいろいろお話をさせていただきまして、お話をしている間に、僕らが通っていた昔の小学校、今とは全く違う環境ですね。そういうものを思い出すことができまして、それで、移住をするんだったらこういうまちがいい

のではないかと決意をしました。

大西さんからいろいろお話を聞かせていただく中で、神石高原町にはおいしいものがたくさんある。いいものがいっぱいある。それをもっと全国の皆様に知っていただきたい。そういったことをどんどん進めていきたいというお話を聞きまして、そういったことだったら僕も協力できるのではないかと。

僕はもともと板前をしております、実家も肉屋をしております。ものをつくる加工品とか、そういったものをつくるのは自信があったので、そういう面で協力ができるのではないかと思いました。

いざ定住になるのですけれども、左上の写真が大西さん家族と私の家族と愛犬たちと一緒に写っている写真です。最高のロケーションで、空気もすごくおいしい場所です。下に写っているのが当時小学校1年生の息子と愛犬、黒ラブのココです。

この神石町に引っ越しをして子どもが一番変わったことが、笑顔が増えました。1日中網を持って、犬と走り回って、すごく楽しそうです。これだけで親としては十分幸せです。

最初は800人から50人という環境が変わって、子どもが対応できるのか心配でしたが、そんな親の心配は関係なく、全然とけこんで、今では空手とか野球とか、今度は神樂もしたいと言っております。

神石高原町産だよと書いてありますけれども、昨年8月に待望の長女を出産いたしました、すごくかわいいです。引っ越しして、開業して、そんな忙しい中での出産でしたが、娘の顔を見て、そんなことは全部吹き飛びました。この子どもたちの将来のために、これからどんどん頑張るこの神石を変えていかなければいけないと、本当にそう思いました。

昨年4月に福山から神石高原町に移住して、先ほど知事からご紹介のありました仙養ヶ原という場所にドッグカフェをオープンいたしました。最初は、起業するときいろいろな場所を探していたのですけれども、そのときに大西さんのほうから神石高原町の仙養ヶ原でピースウィンズジャパンというNGOの財団が、災害救助犬トレーニングセンターという、捨てられて殺される寸前の犬をもらい受けてきて、それを災害救助犬に育成して、いろいろなところの救助犬として訓練していこうという場所をこの仙養ヶ原につくるということを知りまして、その上にちょうどカフェに使えるような場所がありまして、ここで特産品とかそういったものをつくったらいいのではないかと、この場所を提供していただきました。

長年福山に住んでいましたが、仙養ヶ原というところに行きかけたことがなかったので、初めて行ったときに、本当に何もなかったのでびっくりしました。周りはゴルフ場で、大自然の中にふれあいの里という公園がありまして、それがすごくよかったです。非日常の世界に連れていってくれるような場所で、本当にものを忘れて1日遊べる場所です。その場所を加工品とかそういったものの工場にするのはもったいない。それで、そこをカフェにしようと考えました。そのときに、ちょうど下にいろいろな犬関係の災害救助犬、地方か

らそこに災害救助犬のトレーナーたちも在中するというので、じゃあ、そこをドッグカフェにしよう。私も犬が大好きだったのでドッグカフェにいたしました。下には災害救助犬のトレーナーがいる。私たちが上でドッグカフェをする。そこで、まちに協力をさせていただきまして、右上に写っているのがドッグランですけれども、このドッグランをまちにお願いしてつくっていただきました。

そんなことで、この中国地方で最大のドッグランとドッグカフェ、ドッグトレーナーもいるという総合的な施設。このふれあいの里にはログハウス、コテージみたいなものがあるのですけれども、そこも愛犬と一緒に泊まれるコテージにさせていただき、総合的なドッグリゾートとして開業することができました。

今では遠方からお客さんが多数、左下に写っていますが、静岡や九州からも、ほかにはないということでたくさんお客さんに来ていただいております。

余談なのですが、右下にあるのがカフェシモンズの名物でダブルメンチカツバーガーです。すごくボリュームがあります。彼が下の災害救助犬のトレーナーをしているフジサキくんといいます。かなり若い子でも苦戦しておりますので、是非一度試してみてください。

次が、最初に移住してくるときに大西さんからいろいろご相談がありました神石高原町の特産品をつくって全国に広げていきたいということで、神石には何があるのかといろいろ調べました。私が持っている知識の中で、今まで温めてきていたもので一番自信があった、とりあえずメンチカツから始めよう。神石にはおいしい肉があります。おいしい野菜もあります。そういったものを集結して、私が持っている知識を全部つぎ込んだ最高傑作に仕上がっております。

一昨年11月から神石高原マルシェというものがまちおこしとして、新しい神石高原町の名物を発掘していこうということで始まりました。神石高原マルシェに毎回出場させていただきまして、すごくお客様に定評いただいております。

昨年11月に、神石高原マルシェのグルメグランプリというものを開催しまして、そのときに準グランプリをいただきました。神石高原町の名物として、今はまちからも推奨いただいております。

今日も、神石高原町のさんわ182ステーション、道の駅で、今日、明日と神石高原マルシェを開催しておりますので、もしよろしければ足を運んでみて、神石高原メンチカツ、おいしいものがたくさんあります。是非食べてみてください。

最後になりますが、これからの挑戦です。神石高原町の特産品を使った商品を全国の食卓にお届けしたい。全国の食卓に届けて、その食卓を笑顔にしたいという強い思いからこの事業を始めました。その大きな一歩としまして、神石高原メンチカツがコンビニのローソンでこの5月より発売が決定いたしました。KOKOカンパニーが監修をして、神石高原町が推奨して、神石高原メンチカツが5月からローソンの店頭でからあげクンと並んで

発売になりますので、是非一度見かけたらよろしく願いいたします。

それに伴ってインターネット販売を拡大していきまして、全国の食卓にどんどん新しいものを、神石高原町のすばらしい、いいものをどんどん全国に発信していきたいと考えております。

もう一つが、神石高原町へIターンやUターンされる方の雇用の場をつくるということで、今、Iターンされている方で、いろいろお話をする機会が増えまして、一番多くある声が、やっぱり働く場所がないということをすごくよく聞きます。私どもも事業をどんどん拡大して、そういった人たちの雇用の場をつくっていき、よきアドバイザーとなれるように頑張っていきたいと思っております。

神石高原町をどんどん盛り上げて、若い子たちにどんどんこの神石高原町にIターンやUターン、また神石高原町から出て行く方々をちょっとでも減らしたいし、神石高原町をもっと活気のあるまちにしていこうと考えておりますので、どうぞよろしく願いいたします。どうもありがとうございました。

(知 事)

池口さん、どうもありがとうございました。もともと福山のご出身なわけですがけれども、見事にラブ神石高原町に変身をされて、すばらしい実践活動をやっていらっしゃると思えました。

移住するにあたって、学校の子どもたちが50人しかいないということで、本当に子どもの数が少ない、あるいは人口が少ないということが弱みだと受け止められることが多いと思いますけれども、見方を変えたらすばらしい環境であったり、あと先生が目が行き届くとか、多分まちの中で子どもたちが自分たちで勝手に網を持って走り回って遊びに行くというのは、小学校低学年だとなかなか難しいのが現実ではないかと思いますが、神石高原であればそれができるということで、子育ても少し楽なのではないかという気もします。そういうふうに見方を変えると、弱いと思っていたものが強いものになる。その見方を変えた強いものを使ってすばらしい暮らしができるというのを実践されているというのが本当によく分かりました。また、夢を持って取り組めば、難しいこともだんだんと実現していく。この池口さんのメンチカツが全国のローソンで、からあげクンの隣に並ぶようになったら本当にすばらしい。全国に神石高原の名前も知られたらいいのですけれども、それも、何とか特産品をつくりたいという思いを、実際に思うだけではなくて、あるいはそうしたらいいじゃんとか誰かに言うのではなくて、自分がやっぱりそれをやられたということから広がっていったということではないかと思えます。本当にこれからも広島県の中山間地域には大きな課題がありますけれども、池口さんのような方がどんどん増えたらすばらしい地域にますますなっていくのではないかと思えます。それではもう一度池口さんに大きな拍手をお願いします。ありがとうございました。

(司 会)

ありがとうございました。

意見交換

(司 会)

それでは、湯崎知事の「ひろしま未来チャレンジビジョン」の発表と、ただいまの3人の皆様の取組の発表に関しまして、質問と意見交換を行いたいと思います。

なお、本日の懇談会は、地域の取組事例をお聞きし、この地域を中心とした新たな広島県づくりに向けて皆さんとともに考えていこうというものです。このため、質問と意見交換は、この趣旨と、これまでの発表を踏まえた内容のものとさせていただきますので、よろしくご協力をお願いいたします。

また、質問に際しましては、最初にお住まい、またはお勤めの市町名とお名前、どなたに対するご質問か、ご意見かをお伝え願いたいと思います。

それでは、ご質問、ご意見ございませんでしょうか。お願いします。

(質問者A)

質問を失礼させていただきます。湯崎知事、まず福山にお越しいただきましてありがとうございます。

私、この福山でレザースタジオサードという皮工房で皮製品を製造いたしております。いわゆるものづくりの人間です。

先ほど湯崎知事がいろいろおっしゃられた人口減少についてもですが、僕の地元は実は尾道です。尾道でもそういったものは結構叫ばれております。というのも、雇用がない。仕事がないというのが、結構その土地を離れていく理由になる一つだと思います。

それに関しまして、福山とか、先ほど熊谷さんもものづくりのことで提唱されていましたが、こういった備後地方はものづくりがすごく盛んなまちだと思いますが、まず、質問という形で失礼させていただきたいのですが、湯崎知事は、福山は好きでしょうか。

(知 事)

もちろん。すべて県内の土地は好きであります。

(質問者A)

ありがとうございます。これで嫌いとおっしゃられる、そんな心臓の強い方はいらっしゃ

らないと思うのですが、それに続きまして、福山の伝統工芸はご存じですか。

(知 事)

先ほども出ていましたが、下駄とか、備後緋とか、そういうものがあると思います。お琴もそうですね。

(質問者 A)

ありがとうございます。それに関しましても、伝統産業がこれほどあるにもかかわらず、伝統産業のものを地元の、例えば広島市民の方とか、福山市民の方、またほかの他府県でも結構ですが、そういった方がどれぐらい自分らの土地のものを自分らで消費していこうという意識があるのか。また、それを広島県なら広島県で、例えば広島県のものを地産地消という形で、ほかの野菜であるとか、お肉であるとか、そういったものは提唱されていますが、ものづくりというものに関して、何かご提案というか、市民の方に提唱されている取組とかあるのかお伺いしたいです。

(知 事)

実は「BUYひろしま」運動というのをやっています、広島でつくったいろいろなものを県内で使いましょうという運動を、県内各地の市や町、あるいはいろいろな方々のご協力をいただきながら進めています。

(質問者 A)

ありがとうございます。ちょっと質問が長くなるのですが、もう一つ、この私の挑戦にむしろ近いことになるのですが、発表させていただいてもよろしいでしょうか。

(司 会)

時間のこともありますので、端的にお願いします。

(質問者 A)

ありがとうございます。ただいまおっしゃっていただいた四つの伝統工芸の中に、福山の中にもう一つ伝統工芸をこれからつくっていこうという取組を我々はやっておりまして、それが福山レザーという取組でございます。これが五つ目の伝統工芸になれば、レザーという商品は、老若男女、たくさんの方から、いろいろな年配層の方までご理解いただいている素材だと思いますので、これをどうにか福山、また広島、そういったところの地場産業として、産業として発展させていただきたいと思いますので、こういったところを取組として何かお力添えをいただければと思いますので、よろしくお願いたします。

(知 事)

ありがとうございました。

(質問者 A)

ありがとうございました。

(司 会)

ありがとうございました。ほかにも質問とかご意見ございませんでしょうか。どうぞ。

(質問者 B)

福山市内昭和町から参りました私、Bといます。アパレル関係の仕事をしております。私がこれからお話ししたいのは、誰でも、いつでも、この地域のものを世の中に出すことはできるということを私は言いたいです。私自身がやっていることを発表させてもらいたいと思いますけれども、私自身がここに生まれて。

(司 会)

すみません。質問ではないのでしょうか。意見ですか。

(質問者 B)

私が今、お話ししたいのは、皆さんにこの広島県自体をもっと盛り上げるため、例えば今、湯崎知事が言われたように、原動力は県民一人ひとりと言われましたよね。そのところについてももう少し、では、みんながどういうことをやっていくことが大切なのか、ここに気づいていただきたい。そんなことを。

(司 会)

はい。端的にお願いします。

(質問者 B)

端的にいます。そういうことでアパレル関係の仕事をしておりまして、その中で、私は実際のことをいうと、この場に生まれて、この福山にはもっともっといいものがあるのではないかということで、気づいたときに、3年ぐらい前にNHKで龍馬伝というのがありました。テレビです。そこで、鞆にもっといいものがあるのかなと。福山のいいところを自分自身で探していこうと思ったときに、鞆に行きました。僕らは自信をもってPRしていけることがあるのではないかということで、実際のことを言って、僕はアパレル関係

をやっているのです、ネクタイをつくりました。自分でつくりました。鞍龍馬のネクタイというのをつくりました。それをつけることで、福山、鞍をみんなに知ってもらいたい。そういうことをこつこつやってきました。今、言ったように、誰でも、どんなことでも、我々が今していることをPRできる。いろいろなことを考えて、やれることはできる。そういうことで、是非ともここに来ていらっしゃる皆さんがその気持ちになって、原動力は県民一人ひとりということでやっていただければ、ここがもっともっと盛り上がっていくのではないかと、そのように思います。以上でございます。

(知 事)

ありがとうございます。本当におっしゃるとおりで、一人ひとりがそれぞれの職場だとか、役割だとか、PTAでも何でもいいと思うのですけれども、少しずつ新しいこと、前向きなことに取り組まれたら本当に大きく変わっていくと思います。どうもありがとうございました。

(質問者B)

ありがとうございました。

(司 会)

ありがとうございました。では、時間が押しておりますので、あともう一方、お願いしたいと思います。どなたかいらっしゃいませんか。どうぞ。お願いします。

(質問者C)

失礼いたします。私、福山市に住んでおりますCと申します。本日は、入口のほうで皆様にお配りさせていただきました第45回ばら祭、先ほど石井稔さんも最後のほうでお話しいただきましたローズボランティアを募集する部会長として、社団法人福山青年会議所では祭委員会、祭を通してまちづくりを行う、そういう委員会の委員長をさせていただいております。よろしく願いいたします。

本日は、湯崎知事をはじめといたしまして、皆様の取組を拝聴しまして、大変勉強になりました。ありがとうございます。

私は、福山青年会議所の担当が、若い方々と一緒に祭りの一つの企画をつくっていこうという取組を進めておりまして、その中で大学生をはじめとする方々との交流を深めているところですが、なかなか今の若い方は何を求めているのか、これまでのご経験の中で、若い方々から話をされる中で、こういう取組を進めてこられたとか、エピソードですとか、そういったことがありましたら是非ご経験をお話しいただければ大変参考になります。よろしく願いいたします。

(司 会)

知事に対するご質問でしょうか。

(質問者 C)

失礼いたしました。熊谷さんにお聞きしたいと思います。よろしくお願いします。

(司 会)

質問をもう一度お願いします。

(質問者 C)

すみません。取組の中で、若者に体験していただくイベントを進めていらっしゃるのですけれども、若い方と一緒に事業を進めていかれる中で、ご苦労されたご経験でありますとか、エピソード、そういったことをアドバイスとしていただければと思います。よろしくお願いします。

(司 会)

お願いします。

(事例発表者 (熊谷))

突然のご指名でありがとうございます。先ほどの事例発表でもお話ししましたが、我々も若いころから大分年齢がたっていますので、自分の年齢の半分ぐらいの子、それ以下の学生さんらの気持ちとか考え方が分からないのではないかと思います。思いつつ接してはいましたが、恐れてはいないですけれども、そういう偏見とか、そういうものを取りはらって、ちょっとフランクに話をしてみたり、そういう機会をどんどん自分からつくっていくことで、お互いが理解して打ち解けるということ以外にはないと思います。

いずれにしても、学生さんも、自分の好きなことを一生懸命やる姿というのは共通したものがあると思いますので、その辺で一緒に何か合致できる瞬間が分かればいいかなと思っています。以上ですが、よろしいでしょうか。

(司 会)

ありがとうございました。本当に挑戦の実施に向けて貴重なご意見やご質問をありがとうございました。

挑戦発表

(司 会)

それでは、時間が押しておりますので、次の「私の挑戦」の発表に移りたいと思います。

ここで、湯崎知事にはこの私の挑戦の発表のコーディネーターを再び務めていただきます。湯崎知事、どうぞよろしく願いいたします。

(知 事)

ありがとうございます。それでは、「私の挑戦」の発表です。一般の方が1名と、高校生が3名、中学生1名の発表となりました。

今日、ここで皆さんに発表していただきます地域や学校で取り組まれているいろいろな挑戦が明日の元気な広島県づくりのためになると思います。ということで、発表者の方も元気よく発表いただければと思います。

最初は福山市の武井晶代さんです。武井さんは、福山食ブランド創出市民会議の活動を通じて、福山の食ブランドの創出に取り組み、福山の新たな魅力の掘り起こしと観光の振興に取り組んでいらっしゃいます。

それでは、テーマは「掘り出せ！旬の福『福山うずみごはん』」です。よろしく願いします。

(挑戦発表者(武井))

福山食ブランド創出市民会議の武井と申します。本日は先程来から出ております伝統工芸の備後餅を着て参りました。私はこの事業にかかわりだしてから、備後餅を初めて買いました。そして、伝統工芸ですから、是非とも着て歩こうということで、こういう場面ではいつもこの備後餅を愛用させていただくことにしております。こうして皆様一人ひとりが自分のお力でも普及していくことができるのではないかと考えています。

そして、私の挑戦ですけれども、伝統とか誇り、福山のそういったものをつくりたいということです。食で福山を元気にさせたいという福山市の意向もありまして、市民会議のメンバーが21名集まりました。ここで福山のまちの誇りと活性化と、そして知名度を上げるために何かいい食べ物はないかということで、広島はお好み焼きがありますよね。尾道はラーメンがあります。でも、福山は何だろう。そんなところから始まりました。

みんなで視察に行ったり、勉強したり、試食会をしたり、けんけん譚々の意見交換をしたりして、やっとたどりついたのが伝統料理、郷土料理、400年前に始まった「うずみごはん」でございます。私たち市民会議は、このうずみに新たな趣向を加えました。うずまっている具材を福山の旬、宝物ということにいたしました。宝をごはんの中から掘り出していただくというものです。今日の宝さがしのイメージですね。

そして、この提案をまとめまして、市長に提言いたしました。市長は昨年7月、この福山うずみごはんを市の都市ブランドとすることを宣言されました。私たちは、その後も市民の皆様はこのうずみごはんを普及するために様々な活動を行っております。大きなイベントから小さな草の根のような料理教室ですとか、出前講座をしたりとか、そういった運動もしながら様々な普及活動に努めてまいりました。こうして、今では60店舗に及ぶお店の方がそれぞれ趣向を凝らしたうずみごはんを提供してくれるまでに至りました。そして、うずみごはんは、ごはんだけではなくて、パンであるとか、スイーツであるとか、またラーメンといったところまで広がりを見せております。

私たちメンバーの中に女性が5人います。女性が、お店に行って食べなければいけない「うずみ」ではなくて、家庭の中でも普及していきたいということで、うずみ弁当というのを考えました。4種類のレシピがあるのですが、1つはハート型の具材をごはんの中にいっぱい詰めて、宝石箱のようにしたお弁当です。これは愛情弁当と名付けております。その一番下に、食べた後に、例えば愛しているよというカードですね。そういうものをそっと忍ばせておくというものです。食材だけが宝ではなくて、そこに詰められた愛情も宝であるという考え方です。このうずみは400年前から収穫祭などで食べられ、地域の絆をつくる、コミュニケーションのツールとして活用されていました。ですから、夫婦の絆、そして家族の絆、そういったものをこのお弁当箱によって作りあげていただきたいという思いでございます。

私たちは、この活動によって大変すばらしいと思うことがあります。様々な立場の人、産官学民ということですが、大学の先生もいれば、産業界の方もいる、行政もいる。そして、私のように主婦であり、消費者の立場の者もいる。こういった様々な人がけんけん譚々の意見を出しながら、そして、お互いの意見を尊重しながら、ものごとを進めていくことができているのです。私たち女性5名のうち2名は男女共同参画の推進にかかわっております。ですから、女性会、女子会でお弁当を考案したりとかもするわけですが、女性の意見もしっかりとその委員会の中で反映される男女平等参画の取組が本当に根付いた会議であると思っています。

私は、こうした皆さんのお力、様々な人の様々な力によって、短期間の、これは2年間なのですが、2年間でうずみを知らない人はいないぐらいのスピードで普及してきたわけですが、こうした取組ができるのも、一人ひとりがすばらしい力を発揮して、絆を持って取り組んでいるからではないかと思っています。

こうした、私はこの委員会に参加したことをとても誇りに思っています。この誇りを持って、もっともっと活動していけば、市民の皆様にも私たちの思いはしっかり届くのではないかと思います。うずみの普及とともに、絆であるとか、福山市民の誇りも一緒に浸透していけるのではないかと思います。これからも力をあわせて頑張っていきたいと思っております。

(知 事)

武井さん、ありがとうございました。私も、備後絣はもちろん伝統工芸というのは知っているのですが、歩いているのは初めて拝見させていただきました。やっぱりきれいですね。これからも備後絣、それからうずみも確かにすっかり定着した感じでありませうけれども、これからもご活躍をお願いしたいと思います。どうもありがとうございました。

次に、県立府中高等学校1年生の橘高萌さんです。橘高さんは、県東部地域における唯一の女子サッカーチームである「備後府中TAM-S」のキャプテンをされています。

テーマは「チームのことが好きだから～女子サッカーチームキャプテンへの挑戦～」です。よろしくお祈りします。

(挑戦発表者(橘高))

私は府中高校1年生の橘高萌といいます。サッカーを始めて8年になります。現在、私は備後府中TAM-Sという女子サッカーチームでプレイしています。備後府中TAM-Sには20歳から中1の子が所属していて、28人います。昨年、中国女子サッカーリーグに昇格し、1年目で3位となりました。チームはみんな仲がよく、先輩後輩という関係はありますが、本当のお姉さんと妹みたいな雰囲気があります。

そのチームで今年から私がキャプテンになることとなりました。先輩たちとコーチからとりあえずやってみてという感じで言われましたが、少し私は不安に感じていました。なぜなら、私は昨年膝を手術するようなけがをして、中国女子サッカーリーグに2試合しか出ていません。思っていたよりリハビリにも時間がかかり、そのほかにも出られないゲームがあり、正直悔しいことが多い年でした。確かに今までも自信を持って中1から入ったチームですが、なかなか思うようにならず、ゲームに出れないときが多く、やっとつかんだレギュラーでもうまくいかず、正直落ち込んでいた時期もありましたが、サッカーが好きだし、チームメイトも好きだし、少しでもうまくなりたいと思い練習しました。大事な中国リーグの入れ替え戦のときに途中交代させられたこともありました。広島県の頂点を決める試合にも、受験のために出れませんでした。その試合にチームは優勝し、みんなと喜びましたが、正直複雑な思いもありました。

4月21日から中国女子サッカーリーグが始まります。広島県だけでなく、他県の強豪チームとも試合をします。キャプテンとして、チームのみんなと勝利の喜びを分かち合うことで、私はますますサッカーが好きになり、ますますチームのことが好きになりそうです。しんどいことも多いと思いますが、チャレンジしたいです。

最後に、地元の府中市には芝生のグラウンドがなく、地元での公式大会やリーグ戦の試合ができません。いつか地元で応援してくれている人や友達に試合を見せれたらいいなと

思っています。よろしくお願ひします。

(知 事)

橘高さん、ありがとうございます。けがを乗り越えて頑張っている。きっと周りの皆さんもそういった頑張っている姿を評価して、橘高さんに任せようと思ったのではないかと思います。是非またみんなのために頑張ってキャプテンに挑戦していただければと思います。それでは、もう一度大きな拍手を橘高さんをお願いいたします。

次は、県立福山誠之館高校2年生の榑崎裕介さんです。榑崎さんは誠之館高校の生徒会長として、東日本大震災で被災した岩手県立大槌高校の支援に取り組んでおられます。

テーマは「誠援～誠の心で社会に貢献」です。よろしくお願ひします。

(挑戦発表者(榑崎))

これより広島県立福山誠之館高校の活動についての発表を行います。気をつけ。礼。お願ひします。

私たちの活動タイトルはこちらです。「誠援～ナンバーワンエール～誠の心で社会に貢献」。これは私たち誠之館生が中心となって社会に貢献していき、世の中に元気を与えていこうというものです。

それでは、なぜ私たちがこのタイトルに決めたかという、それは、昨年3月11日に起きた東日本大震災が関係しています。皆さんもご存じのように、この大震災は東日本、特に東北地方に大きな被害を与えました。私たちはこのことを知り、自分たちにできることは何かを考え、これまで自分たちにできる範囲で被災地支援の活動を行ってまいりました。

そうした支援活動を行っていく中で気づいたのは、ボランティアの意義というものがありました。それは何かと申しますと、ボランティアをやることで、支援される側だけでなく、支援する側もまた支援される側からパワーをもらえるということです。だから、私たちはもっと多くの人からパワーをもらい、そして、もっともっと多くの人にパワーをあげられるようなそんなボランティアをしたいと思うようになりました。

しかし、そのためには今までとは比べものにならないほどの大規模なボランティアをやっていく必要があります。当然私たちだけでは何もできません。

そのために私たちは誠之館高校全体にボランティアって楽しいという雰囲気をつくることから始めていきました。その一環として、ボランティアに興味のある生徒を集めるためにボランティア愛好会というものを設立しました。現在、ボランティア愛好会は9名しかいませんが、このボランティア愛好会と生徒会を中心に被災地支援の募金活動や校内清掃をやっていきます。

被災地支援の支援活動の大きな節目として、先日3月18日に広島市でAMD A東日本

大震災絆コンサートの運営をさせていただきました。このコンサートには、被災地の岩手県立大槌高校の吹奏楽部の皆さんがこれまでの支援への感謝を込め、演奏しにいらっしやいました。このコンサートには、そのほかにも黒瀬高校による和太鼓演奏、本校チアガールによるパフォーマンス、安古市高校吹奏楽部による演奏が行われました。

また、このコンサートのフィナーレには、安古市高校と大槌高校による合同演奏が行われました。このコンサート中、大槌高校の皆さんが私たちがこうして部活動を続けていられるのは皆さんの支援のおかげだとおっしゃっていました。私たちが見つけたボランティアの意義というものは、ボランティアをする側だけでなく、される側もまたボランティアをすることによって楽しめる。いってしまえば、される側も、する側も同時に楽しめるボランティアの自他満足というものです。

大槌高校の皆さんの感謝の言葉を聞いて、私たちはこれまで行ってきた支援活動が決して無駄ではないと分かり、今後も被災地支援の活動を続けていこうと心の底から思いました。そして、大槌高校の皆さんが笑顔で、心の底から楽しそうに演奏していらっしやる姿を見て、見ている私たちもなんだかとても楽しくなりました。これが自他満足、ボランティアの意義なのです。

ボランティアというものは、募金や清掃だけが含まれるものではありません。人のため、社会のために行う活動こそがボランティアなのです。私はこのことを本校の生徒全員に伝え、そして、ボランティアの意義、自他満足の精神を全校生徒に伝えていきたい。そう思っています。

私たちの昨年度の活動は、被災地支援の募金活動が中心でした。しかし、今年度は被災地支援以外の活動、例えば校外清掃の活動にもボランティアの幅を広げていきたいと思えます。そして、ボランティアの意義を全校生徒の皆さんに伝えるために、校内新聞等で呼びかけ、参加を促したいと思えます。これらを机上の空論にするのではなく、実際に活動に移していき、この誠之館高校を日本一社会貢献が活発な学校にしていきたいと思います。

これで広島県立福山誠之館高校の発表を終わります。気をつけ。礼。ありがとうございました。

(知 事)

榑崎さん、ありがとうございます。今、机上の空論という言葉が使われましたかね。考えるだけではなくて、やってみよう。やると、すごいじゃないか。それがまた被災地の人にも伝わって、また、自分たちのところにも返ってくる。そして、コンサートまで開いて実行、運営をされる。部員も今はまだ9名かもしれないけれども、これからまたその熱意を持って実際に進めたら、どんどん広がっていくのではないかと、そういう期待をさせるような発表だったと思います。改めて榑崎さんにもう一度大きな拍手をお願いします。どうもありがとうございました。

次は、県立福山商業高等学校3年生の川村咲絵さんです。川村さんは、高校在学中に全国商業高等学校協会主催の簿記やワープロなど6種目の検定に1級合格をされています。テーマは「税理士への挑戦～夢は大きく目標は高く 商業高校で見つけ育てた私の夢」です。それでは、よろしくお願いします。

（挑戦発表者（川村））

福山商業高等学校の川村咲絵です。よろしくお願いします。

私の夢は税理士になることです。きっかけは、商業高校に入学して初めて勉強した簿記です。1年生のとき、全国商業高等学校主催の3級取得に向けて、放課後も残って一生懸命勉強しました。自分の力で検定の過去問題が解けたとき、本当にうれしかったのを今でもはっきり覚えています。そのときから私は簿記に魅力を感じ、もっと簿記について知りたいと思い、1冊の本を読みました。その本には簿記をもとに作成された報告書から会社が将来どれだけお金を増やすことができるのか読み取れると書いてありました。簿記はただお金やものの動きを記録するだけだと思っていましたが、会社の将来を見れると知ったとき、とてもおもしろいなと思いました。その簿記を活用した仕事が税理士であり、そこでしか見ることのできない世界観があると思い、さらに興味が深まりました。

税理士を目指す過程はいろいろありますが、私は働きながら実務経験を積み、税理士を目指したいです。働きながら税理士を目指すことは本当に大変なことで、無謀なことかもしれないと思いますが、苦勞した分だけ得るものが多いと思います。苦勞して手に入れてこそ、私にとって税理士という資格は価値を持ち、誇れるものになると思います。

私がこの夢を見つけることができたのは、商業高校で学んだからです。商業高校では、普通科とは違った技術、知識を身に付けることができます。1年生の1学期のうちにパソコン、電卓は全員がキーボードを見ないで入力できるようになります。また、多くの資格取得のチャンスがあります。私も初めて検定を受検したときは緊張しましたが、合格したときは本当にうれしく、次も頑張ろうという意欲が湧いてきました。できて当たり前のことかもしれませんが、私にはとても達成感を与えてくれました。

それがきっかけで、私は積極的に資格取得に挑戦し続けました。1学期に4種類の検定が重なり、しんどい思いをしたときもありましたが、友人とともに頑張り、合格することができました。あきらめずに頑張ることの大切さを改めて知りました。まさに商業高校でしか体験することのできない貴重な体験だったと思います。

私は高校3年間で簿記、ワープロ、プログラミング、情報ビジネス、電卓、商業経済の6種目1級と秘書検定2級、ビジネス電話検定2級、日本商工会議所簿記3級を取得しました。6種目1級合格は私が頑張った努力の証です。

ここまで頑張ってくれたのは、一緒に勉強した友達や、分かるまで丁寧に指導してい

ただいた先生方,いつも励まして応援してくれた地域の方や家族の存在があったからです。これから私は一人の社会人として働きます。商業高校で学んだことをこれからの自分づくりにも生かし,私の夢である税理士になるため,これからも挑戦し続けます。ご清聴ありがとうございました。

(知 事)

ありがとうございます。高い目標だけでなく,志も高そうな雰囲気を感じさせる発表でした。これから社会人になって,またいろいろな別の苦勞もあると思いますけれども,もう大丈夫だと我々本当に思いますので,是非これからも頑張ってください。それで是非税理士になってください。それでは,川村さんにもう一度大きな拍手をお願いいたします。

それでは,最後の発表です。福山市の向丘中学校3年生の山口竜矢さんです。山口さんはこの1月に広島市で開催された第17回全国都道府県対抗男子駅伝の第2区で14人抜き,区間賞をとったことで中学MVPを獲得されました。

テーマは,「陸上から僕が学んだことと将来の夢」です。それでは,よろしくお願ひします。

(挑戦発表者(山口))

福山市立向丘中学校の山口です。よろしくお願ひします。

僕の将来の夢は,オリンピックのマラソンに出場して,世界のトップレベルの選手たちと勝負をすることです。この夢はとても大きいけれども,この夢に向かって日々努力し,僕は必ずそれを実現してみせます。

僕が中学校3年間の陸上競技生活の中で学んだことは,夢や目標は,したいやなりたいでは実現できない。そして,練習をするだけでは実現できないということです。

どうしてそのように考えるのかというと,中学校で陸上を教えてくださった顧問の前原先生のもと,3年間ほとんど休むことなく,朝も夜も練習に取り組み,全国大会でも十分優勝できる力をつけていただいたのに,全国レベルの大会で一度も優勝することができなかったからです。

昨年8月に行われた全国中学校陸上競技大会では,自分は毎日の練習を確実にこなしており,優勝する自信もありました。しかし,結果はぎりぎり8位入賞でした。そのとき,どうしてこのような結果になってしまったのかを反省しました。そして,気がついたことがあります。それは,陸上の練習以外のこと,日々の生活の中で大切にしなければいけないことが十分にできていなかったことです。先生はよく,夢や目標は,したいやなりたいでは実現できない。挨拶や返事を大きな声ですること,お世話になっている人,応援してくださる人への感謝の気持ちを持つこと,食べるものや睡眠時間など自己管理をすること

が選手として大切なことだと言っておられました。僕は日々の生活の中で選手として大切な心を鍛えることが不十分だったと気づきました。9月以降、先生に言われていることを大事にし、10月のジュニアオリンピックに向けて努力しました。もちろん練習は今まで以上に頑張りました。結果は3位でした。目標としていた優勝することはできませんでしたが、自分らしい走りができ、自己ベストも出すことができたので、確実に自分にも力がついているということを実感できました。このとき、練習だけではなく、普段の生活が大切なのだということを強く感じました。

今年1月に行われた都道府県男子駅伝は、自分にとって中学日本一になる最後のチャンスでした。僕は区間賞をとると毎日声を出して断言し、練習や生活態度も気を抜かないよう努力しました。だからこそ、都道府県男子駅伝は今までの大会とは違い、強い自信をもって臨むことができました。結果は、目標としていた区間賞をとることができました。

これからの目標は、入学が決まっている世羅高校でさらに練習に励み、力をつけ、1年生で国体の3,000mで優勝、そして3年生でインターハイの5,000mで優勝します。高校駅伝は3年間広島県代表として出場し、選手として京都の都大路を走ります。そして、チームの優勝、区間賞をねらいます。高校卒業後は関東の大学に進学し、箱根駅伝を走ります。そして、僕の一番の夢、目標であるオリンピックのマラソンに出場し、世界のトップクラスの選手たちと勝負し、日本に金メダルを持って帰ります。以上が僕の夢、これからの挑戦です。ありがとうございました。

(知 事)

山口さん、ありがとうございました。山口さんの話を聞いていると、オリンピックで金メダルというのは、すごく遠い話だけれども、なんか実現してくれそうな、そんな気になります。お話の内容も、ほかの子どもたちだけでなく、たくさんの方にも聞かせたい、そんな発表をしていただきました。その夢に向かって頑張ってください。山口さんにもう一度大きな拍手をお願いいたします。

(司 会)

ありがとうございました。

閉 会

(司 会)

以上で予定のプログラムは終了となります。それでは、ここで湯崎知事に本日のまとめをお願いしたいと思います。

(知 事)

長い時間で、予定時刻も過ぎてしまいまして本当に申し訳ありませんでした。また、最後までほとんどの方がおつき合いいただきましてありがとうございました。

冒頭に皆さんの発表をお聞きいただくと分かりますと申し上げたと思うのですが、いかがでしたでしょうか。今の中学生、高校生の皆さんの発表も含めて、広島県には本当にすばらしい宝があると思います。やっぱり最後は人の力ではないかと思います。この人の力を最大限に発揮してもらおう。一人ひとりが発揮する。そのことによって、誰かにつくってもらおう広島県ではなくて、我々自身がつくっていく広島県が実現できるのではないかと思います。これからこの会を通じて、是非皆様もお帰りになって、いろいろな場面、職場であるとか、家庭であるとか、あるいは地域であるとか、いろいろなことに携わっていらっしやると思いますが、是非一歩前へ出る。そういうことに取り組んでいただけると大変すばらしいと思います。本当に今日はどうもありがとうございました。

それで、最後に一点だけお願いがございます。先ほど私の発表の「安心な暮らしづくり」、その中でがん対策日本一を目指していますということを申し上げました。ここでも、実はいろいろなことを県としてもやっているのですが、住民の皆さん、県民の皆様にご協力をいただかないとどうしてもできないことが一つございます。それは何かというと、がん検診に行っていただくということです。広島県内、実は他の地域と比べて、検診の受診率が低いです。今、がんは早期に発見すれば治すことができる病気になりつつあります。そのためにも、まず検診を受けていただく。早く見つけるということが第一歩でありますので、是非皆様ご自身、また身の回りの方々にも呼びかけていただいてがん検診を受けていただきたいと思っております。

私もこの2月に受けました。大腸がん、肺がん、それから胃、十二指腸ぐらまで調べまして、健康でございます。皆さんも是非チェックをしていただければと思います。

それでは、以上で本当に終わりとさせていただきます。ありがとうございました。

(司 会)

以上をもちまして、「湯崎英彦の宝さがしー未来チャレンジ・トーク」を閉会いたします。ご来場いただきました皆様、本当にありがとうございました。

なお、ご来場時にお渡ししたアンケートと「地域の宝ネットワーク」の申込書を出口で回収いたしますので、どうかよろしく願いいたします。

また、地域の宝ネットワークでは、フェイスブックによる情報の交流も始めております。もしフェイスブックの交流の手続きの仕方が知りたいという方がございましたら、向かって右前のほうでこの会が終わった後やりたいと思っておりますので、ご希望の方は向かって右前

にお集まりください。

本日は、ご参加をいただきまして誠にありがとうございました。どうかお気をつけてお帰りください。

出口で、福山うずみごはんのマップとレシピ集をお配りしますので、お持ち帰りください。